

## 梅雨にぴったり！雨がキーワードの本

今回は、梅雨にぴったりの雨がキーワードとなっている本を3冊ご紹介します。

1冊目は、伊坂幸太郎著『死神の精度』です。

この本の主人公は、音楽好きの死神千葉です。彼はいわゆる「雨男」で、「晴天を見たことがない」くらい、彼が仕事をするときには必ず雨が降っています。死神の仕事は、人の人生を決めることです。死神の「調査部」員として人間の世界に派遣された千葉は、調査対象である人間を一週間観察し、「可」もしくは「見送り」を判断します。「可」と判断すると、対象は八日目に死亡し、「見送り」と判断すると対象は死ぬことなく天寿を全うすることになります。そんな死神の調査対象となった6人の最期の七日間を、クールでちょっとズレている死神千葉の視点から描いた物語です。雨とともに現れる死神が出会った、どこかおかしく温かい6人の人生を楽しんでみてください。

2冊目は、大崎梢著『クローバー・レイン』です。

主人公の工藤彰彦は、老舗の大手出版社「千石社」に務める編集者です。彼はとあるパーティーの帰りに、思いがけず出版先の決まっていない素晴らしい原稿を手に入れます。作品の内容に感動し、ぜひとも千石社で本にして出版したいと意気込む彰彦でしたが、著者の家永嘉人には近年ヒット作がなく、大手出版社である千石社から本を出すのは難しいということが分かります。会社からなかなかGOサインを出してもらえない彰彦でしたが、なんとしてでもこの作品を本にして多くの人に読んでもらいたいという熱い思いから、周囲を巻き込み、いくつもの困難を乗り越え、本を届けるために奮闘していきます。この本に出てくる「雨」のキーワードは彰彦が出会った作中の本『シロツメクサの頃』に出てきます。しおれたシロツメクサの上に降り注ぐ「やさしい雨になりたい」という言葉の中に込められた想いを、ぜひこの本を読んで考えてみてください。

3冊目は、高橋順子文、佐藤秀明写真『雨の名前』です。

この本は、美しい雨の写真や詩、エッセイと共に「雨」の名前を紹介してくれる本です。例えば、ひとえに「梅雨」といっても様々な「梅雨」の姿があります。暴れ梅雨、女梅雨などたくさん名前を持っているのです。暴れ梅雨とは、雷をともなって昼夜を問わず降りつづく集中豪雨のことで、女梅雨とはしとしと降りつづく型の梅雨のことで、しとやかな女性のイメージからつけられた名前のようなのです。この本を読むと、その名前ひとつひとつに込められた意味、雨の情景を知ることができます。さらに、四季の美しい写真を眺め、時には詩やエッセイで雨の物語を楽しむことができる、そんな一冊となっています。

図書館で本と共に雨の日を楽しんでみてはいかがでしょうか。図書館には、この他にもさまざまな本があります。ぜひ図書館にお越しください。